時枝論争とソシュールの言語（ラング）概念
——言語における実体と主体[1)]

末　永　朱　胤

はじめに

全てはある書かれなかった書物に始まる。現代言語学の父とも、二十世紀思想を席巻した構造主義と記号学の祖とも称されるフェルディナン・ド・ソシュールだが、その主著 *Cours de linguistique générale*『一般言語学講義』（以下 CLG と略）は数奇な運命を背負っている。自らの画期的な言語理論を著すことなく世を去ったソシュールだったが、シャルル・バイイとアルベール・セシュエが、ソシュールのジュネーヴ大学での講義「一般言語学」を受講した学生たちからノートを借り、それを基に執筆・編集し、1916 年刊行したのが CLG であることは周知のことだ。

だが、この書物の世界で最初の翻訳が日本においてであったことはそれほど知られていないかもしれない。小林英夫による邦訳である。CLG 出版から十二年後の 1928 年、ドイツ語訳に先立つこと三年、文体学に関する論文で学士を修了したばかりの若き研究者小林英夫が岡書院から刊行したのだった。ソシュールに端を発し、二十世紀の言語学を席巻することになる構造言語学が、お膝元のヨーロッパでもまだ台頭していない時期である。ただしこのときの書名は原著の直訳ではなく『言語学原論』である。十二年後、小林は岩波書店より改訳を出版する。さらに三十二年後、同じく岩波書店より浩瀚な注を付した三回目の訳を原著に忠実な『一般言語学講義』の題で出した。小林は結局 1928 年、1940 年、1972 年と三回にわたり CLG の訳を刊行したことになる。最初の訳から約九十年にわたり、CLG 邦訳は『言語学原論』から『一般言語学講義』へと名を変えつつ、現代言語学の古典として版を重ね、日本の知的風景の一角に確固たる位置を占め続けてきたと言ってよい。日本における西

洋言語学の受容においてだけでなく、世界的なソシュール受容の文脈からも、小林英夫の功績ははかりしれない[2)]。

国語学者時枝誠記が『国語学原論』を出版し、その多くの頁を割いてソシュール理論の諸概念に激しい批判をなげかけたのは1941年のことだった。二番目の小林訳が出版された翌年のことである。この時枝のソシュール批判に続き、1948年以降70年代の初めまで二十年以上にわたりゆうに二十以上の論考が、ソシュール派、反ソシュール派の両陣営から発表されることになる。俗に言う「時枝論争」である[3)]。

時枝のソシュール批判はおもにソシュールの言語（ラング）概念とエピステモロジー（科学基礎論的立場）に向けられているが、次のようにまとめることができよう。

・科学は基本単位となる対象の措定から出発しなければならないというソシュールの科学観は原子論であり、自然科学に典型的な方法論である。
・ソシュールは言語（ラング）をして基本単位とし、これを言語学の中心的対象とするが、言語現象の本質に反した言語観にもとづいている。
・ソシュールは言語（ラング）を社会的事実と言い、諸個人を結ぶ媒体とみなしている。これは言語（ラング）を主体から切り離して外在化し、実体化することである。

一言で言えば時枝のソシュール批判は「言語（ラング）」を実体とみなす言語観への論難と言えよう。

こうした時枝のソシュール批判と表裏をなし、ソシュール理論に対置されるものこそ、時枝自らの学説「言語過程説」である。それによれば、言語現象は時間的に展開される過程以外のなにものでもなく、言語学は発話の観察に基づかねばならない、そして主体の発話行為こそ言語現象の本質であるという。

ここで注意しておかなければならないのは、フランス語が読めなかった時枝の以上のようなソシュール理論への批判は『言語学原論』の原書CLGの読解に基づいて展開されたものではなく、全面的に小林の翻訳に拠っていることである。ここに、日本のソシュール受容が時枝論争と

いう独特の現象を呈した所以の一端がある。

もとより traduire est trahir（「翻訳は反訳＝裏切り」）と言う。どのような翻訳であれ原文の意を 100％「正しく」再現することはありえない。とはいえ、小林訳に、一般に原文と翻訳の間にありうべき避けがたい齟齬の範囲を超えた問題があったこともこれまでに指摘されてきた。時枝論争の終盤において時枝側の旗色が悪くなったのも服部四郎による「不適切な翻訳により生じた時枝の誤解」という指摘が説得力を持ったからだった。

複数の言説が関係をもつとき、そこには当然言説間の距離があるが、距離とは解釈であり、ときとして齟齬であり「誤解」である。そしてそうした複数の「ずれ」が複合するとき、それは読解にどのような影響を及ぼすだろうか。

時枝のソシュール批判という言説が呈しているのはまさにこのような複数の言説間の距離が錯綜して起きる問題である。時枝が読解の対象としたソシュールとは CLG の小林英夫訳が与えたものである。ここには、先ず時枝と CLG の距離があり、さらに CLG 邦訳（翻訳）と CLG（原文）の距離がある。時枝と CLG の間に翻訳が介入している。このことは時枝のソシュール批判にどのような影を落しているのか。

したがって、本稿が取り組む第一の作業は、CLG と翻訳の間の距離と、CLG と時枝（読解）の距離とをつきあわせることである。実体批判に収斂する時枝の論点といくつかの小林の訳語との関係の検証である。問題があると思われる三つの訳語を取り上げる。「単位」「実在体」「媒体」である。時枝のソシュール批判は、上で見たように「言語（ラング）の実体化」への批判だった。小林の翻訳に見いだされるこれらの訳語は、実体批判という時枝の論点とどのように関連しているのだろうか。

本稿の第二の作業はさらにもう一つの距離の問題にかかわる。それは、第一の作業でなす、CLG と時枝による批判との間にある距離、そして CLG とその小林訳との距離という二つの距離についての考察が必然的に導く地点である。その地点とは CLG とその基となった原資料との間の距離、第三の距離である。

既に触れたように現代言語学のバイブル CLG はソシュールの死後、「一般言語学」の授業に出席していた複数の学生のノートを主な資料と

し、さらに一部はソシュール自身の手稿を基にしてバイイとセシュエが編纂・刊行したものである。当然ながら CLG と原資料との間にはひとつの距離がある。原資料に基づくソシュール研究の嚆矢、ロベール・ゴデルの労作『フェルディナン・ド・ソシュール『一般言語学講義』の原資料』（Godel, 1957）以来、ソシュール研究とは、人口に膾炙したバイイ、セシュエ編 CLG が呈するソシュールと、手稿原資料が示唆する「真のソシュール」との距離を測る作業であったと言っても過言ではない。

訳語「単位」「実在体」「媒体」と、「第三の距離の問題」はどのように連関しているのか。小林の翻訳の問題は、CLG という二十世紀の言語学を発動した書物が負っている数奇な運命の問題へと遡るだろう。

1. 時枝論争と小林英夫訳

時枝論争において翻訳の問題がその帰趨に重要な影響を与えたことは、論争史に関心のある者の間では周知のことである。われわれは訳語「単位」「実在体」「媒体」を取りあげるが、特にこの前二者については論争の過程で、また論争史についての論考において既に議論されてきた[4)]。にもかかわらず、われわれは、上で述べたように、われわれのテーマである、原文、翻訳、読みの三者がおりなす三つの「距離」の問題を検討するよすがとして、これらの訳語を以下順次とりあげ、その子細とその影響をわれわれなりに振り返っておきたい。

1 ― 1.「単位」

CLG 序説第三章「言語学の対象」は、ソシュール言語理論の重要概念「言語（ラング）」をめぐる考察だが、その内の一つのくだりを、小林英夫は 1940 年の翻訳の中で次のように訳している。

> 言語活動は、全体としてみれば，多様であり混質的である；数個の領域に跨がり、同時に物理的、生理的、かつ心的であり、なほまた個人的領域にも社会的領域にも属する；それは人間的事象のいかなる部類にも収めることができない：その単位［unité］を引出すすべを知らぬからである。／之に反して、言語はそれ自身一体であり、分類原理

をなす。（p.19。［　］は引用者による補足。「／」は原文改行。旧字体の漢字は新字体に直した。以下同様）

このくだりと、それに基づいた時枝によるソシュール批判の検討に入る前に簡単に用語を確認する。

「言語活動」の原語は仏語 langage である。langage は意味の広い語で、仏和辞典では「言語機能」「言語」「言葉」などと訳される。小林英夫は「言語活動」と訳している。CLG の問題のくだりの直前には「ところで、言語［langue］とは何であるか。われわれに従へば、それは言語活動［langage］とは別物である；それは後者の一定部分にすぎない」（小林訳）とあり、言語と言語活動を区別し、言語は言語活動の一部であるとしている。また、見たように、言語活動は「同時に物理的、生理的、かつ心的で」あるのだから、発音という空気の振動としての言語現象（物理的領域）から、発声器官や聴覚器官の働きとしての言語現象（生理的領域）、そして話し手や聞き手の意識の領域での言語現象（心的領域）までを含んでいる。つまり、小林が「言語活動」と訳した langage（ランガージュ）とは言語現象一般を指す最も広義の語である。

これに対し「言語」は langue（ラング）の訳だが、「日本語」「英語」「フランス語」などの「国語」「特定言語」「固有言語」にあたる。固有の発音、語彙、文法を備えた言語体系であり、言語現象（ランガージュ）に含まれる一部である（言語（ラング）はランガージュの心的領域に含まれる）。

ちなみに、小林訳で「言」と訳されるのは parole（パロール）である。言語（ラング）に基づいた発話行為のことであり、現在では「発話」と訳されることが多い。ランガージュと言語（ラング）と発話（パロール）の関係は、ラングとパロールを合わせた全体がランガージュである。

以上を踏まえ、問題のくだりを検討する。このくだりを含む第三章一節の議論の意図は「言語活動（ランガージュ）の研究において言語（ラング）に第一の地位を与えるため」（CLG, p.27）という。言語活動（ランガージュ）の全体と言語（ラング）が対比されている。言語活動（ランガージュ）は「多様であり混質的である；数個の領域に跨がり［…］その単位を引出すすべを知らぬ」。それにたいして、言語は「それ自身一体」をなす。

時枝はこのくだりを引き合いに出した後[5]、次のように批判する。

言語活動は最も具体的な対象であるにも拘はらず、［ソシュールが］これを捨ててその中に更に「言語（ラング）」を求めようとする根本的な理由は、言語活動が混質的であつて、それ自身一体なるべき単位をそこに見いだすことが出来ないからであるといふのである。［…］かくして単一単位を求めようとする彼の態度には、明かに、科学の出発点は単位の認識から始められねばならないといふ考が存することを知るのである。この意図は、既に対象の考察以前に於いて、対象に対して自然科学的な原子的構成観を以て臨んでゐることを示すものである。［…］具体的な対象を限定して、その中に自己の要求する処のそれ自身一体なるべき「言語（ラング）」を学の対象として定立し得ても、それは具体的な言語経験自体の考察を意味しないことは明かである。我々の学問の目的は、具体的な言語経験それ自体が如何なるものであるかを尋ねようとしてゐるのである。自然科学の見出した処の究極不可分の単位である原子は、自然科学的対象の構造形式に規定された必然的結論であるが、同様なことが言語の場合にも適用できるかどうかそれは疑問である。（p.62-63。旧字体の漢字は新字体に直した。以下同様）

時枝はソシュールが言語（ラング）を、学の出発点となるべき単位としたととがめている。ある単位を対象と定めて学を築くのは自然科学の方法論であり、そのような原子論的方法論は言語学に適用すべきではないという。だがこの論難は、CLG を原書で読んだ者は怪訝に思うだろう。このくだりには時枝が言うような原子論は微塵も見出されないからである。問題は小林が原文の unité という語を「単位」と訳したことにある。問題のくだりを我々なりに訳してみよう。

コトバ（langage）の全体はさまざまな形をとり、多様なものが入り混じっている。複数の領域にまたがっており、同時に物理的、生理的、心的であり、さらに個人的領域にも社会的領域にも属している。コトバは人間的事象のいかなるカテゴリーにも分類されない。なぜなら、どのようにしてその統一性［unité］をひきだせばよいかわからない

からだ。／これとは逆に言語（langue）はそれだけで一つの全体をなしており、［それとほかのものとを区別する］分類の原理となるものである。（CLG, p.25）[6]

仏語 unité には大まかに言って二つの意味がある。「統一性」と「単位」だ。このくだりでの unité は「単位」ではなく「統一性」と訳すべきだっただろう。言語現象（ランガージュ）は様々な異質な要素を含み、その全体を通じて統一的な性質は見出されないが、その中に見出される言語（ラング）は他と区別される統一的な一全体をなすと言っているのである。このくだりで、ソシュールが言語（ラング）を自然科学的な意味での「単位」とし、これを言語学の出発点に据えようとしたと時枝に誤解させた理由のかなりの部分が、unité を「単位」とした小林訳に由来するのは否定できない。

1－2.「実在体」

CLG「第一編　一般原理」、「第一章　言語記号の性質」においてソシュールの記号概念を提示する有名な一節から、訳語「実在体」を取りあげる。小林は次のように訳している。

それゆゑ言語記号は二面を有する心的実在体である；［…］この二つの要素はかたく相連結し、相呼応する。（1940 年訳、p.90-91）

語は音であると同時に意味である。上のくだりでの二面とは語をなす音の側面と意味の側面のことだ。そしてソシュールは語を言語記号と呼び、その音の面が聴覚像、意味の面が概念だとする。聴覚像と概念が一つになったものが言語記号という単位をなすと言い、これは「心的実在体」だとする。「実在体」の原語は「entité」である。「もの」「存在」などと訳されるが、哲学的な語義としては「実質」「実体」「本質」とも訳される。これらの訳語も小林の「実在体」も、いずれにせよ、容易に物質的実在や質料的実体を思わせる。そしてそのように読者が受け取れば、このくだりでのこの語の意味を全く誤解してしまう。時枝がそうしたのであろうように。

ではここでの entité とは、どのような意味か。代表的な辞典『Petit

Robert』はこの語の哲学上の用法として次の語義を挙げている。

> 物質的統一性を備えている存在とみなされる物だが、その客観的存在は関係からのみなる。

すなわち、簡単に言えば、物理的実体ではなく「もっぱら関係からなる物」となるだろう。「言語記号は［…］心的 entité である」とは、言語記号＝語とは、物理的実体ではなく、一定の音表象（聴覚像）と一定の意味表象（概念）の連合という形式的な関係からなる抽象的な単位だ、ということにほかならない。「実在体」という小林の訳語から想像されうる「質料的実体」という意味とはかけ離れていると言わねばならない。

しかし、小林の訳語「実在体」を、おそらく、自然科学の対象に通じるなんらかの「実体」の意味にとったのであろう時枝は、このくだりに次のようにコメントしている。

> 聴覚映像[7]と概念とが、脳髄の中枢において聯合するという事実は、心理学的にも生理学的にも証明されることであるが、それが聯合という主体的な精神生理的現象である限り、これを構成的客体に置直して考へることは許されないのである。かやうにして、言循行[8]において求めた「言語（ラング）」は単一単位でないのみならず、二面の結合とも考へ得られないものであつて、あくまで精神生理的複合単位であり、厳密にいへば、聴覚映像→概念、概念→聴覚映像として聯合する継起的な精神生理的な現象に他ならないのである。継起的過程を、並列的構造の単位として認めるといふことは、常識的便宜的説明としては許されるとしても、それによつて若し学問の体系に矛盾をきたす様な場合には、断じて許すことが出来ないのである。（p.65）

時枝はソシュールが言語を「構成的客体」にしているとして激しく批判している。時枝にとり言語は実体ではなく過程でなければならない。さらに、時枝はソシュールを、言語（ラング）を実体化したとしてこう批判する。

> ［ソシュールおいては］「言語（ラング）」は聴覚映像と概念との結合

> といふ純心理的実体として認められたものではあるが、それは何等言語主体との交渉のない社会的事実としての存在であつて、その存在形式は全く物的対象と異る処のないものである。（p.82。下線、引用者）

時枝は、もし小林が entité という語に別な訳語を当てていても、これほど激しくソシュールを批判しただろうか。答はむずかしいが、その可能性は高い。なぜなら、この語はもともと訳が困難な語だからだ。困難どころか不可能かもしれない。仏和辞書は「実体」という訳語を与えているが、対比的な意味を持つ substance（「物質」「実質」「実体」）を引いても同じ「実体」が訳語にある。「実体」は二つの相反する意味を担っているのだ。この問題を避けるには、新造語にでも訴えねばならないのだろう。小林が当てた訳語「実在体」はまさしくこの両義性を避けるためになされた新語だろう。だが、見たようにうまくいかなかった。もはや小林訳の不手際の問題ではなく、二つの言語の間の翻訳不可能性にかかわるとも言える。

1－3. 「媒体」

小林の訳語「媒体」は 1928 年の翻訳の次のくだりに現れる。再び、CLG 序説第三章、「言語学の対象」の章である。

> 言語活動に依ってかやうに結びついた個人間には、一種の媒体ができるであらう。彼等は皆、同一概念と結合した同一の――と正確には言へまいが稍同一に近い――記載を再造するに違ひない。（CLG, p.29：1928 年訳、p.28。「媒体」の下線は引用者）

このくだりは言語（ラング）という社会的コードが人々の言語活動（ランガージュ）のうちで生成することを説明しているが、時枝は「媒体」という概念に噛み付き、ここでもソシュールが言語（ラング）を実体化していると批判する。

> ソシュールは、右の如く個人間に成立した共通的のものを、単に個物に対する概念と考へず、個人間に成立した一種の媒体であると考へることによって、「言語（ラング）」に外在性と実在性とを与へようとす

る。但し、ここには著しい論理の飛躍が存することに注意しなければならない。[…] かくして成立した「言語（ラング）」なる概念が、直に個人間の思想の伝達をなす媒体であると考へたことは、認識的所産を実在と考へたことになるのである。(p.76)

確かに言語（ラング）が個人の間で、個人の外にあって、諸個人をつなぐ「媒体」であるならば、ソシュールは言語（ラング）を外在化、実体化したという時枝の批判には理があるだろう。しかし、問題のくだりの「媒体」の原語は moyenne である。この語は「平均」を意味するが「媒体」は意味しない。明らかな誤訳だ。われわれなりに訳せば次のようになる。

このようにコトバによって結ばれた全ての個人の間で、一種の平均が確立される。全ての人は、おそらく完全には正確ではないが、近似的に、同じ概念に結ばれた同じ記号を再現するだろう。(CLG, p.29)

この一節は次のように解釈できる。集団の諸個人が言葉を交わすことにより、共通のコードとしての言語（ラング）が分有されるようになる。「平均」とは、個人間で言語（ラング）の偏差は多かれ少なかれあるだろうが、発話の交換の反復を通じて、平均化されていき全体として集団が共有する一つの言語像が成立していくことの比喩的表現である。個人の内なる心的なものとしての言語（ラング）と、社会集団の共有する社会的事実としての、いわば「大文字の」言語（ラング）とが、コトバ（言語活動）のダイナミズムのうちで超越的な自己同一性を形成していく運動として言語（ラング）が捉えられているとも言えよう。時枝の外在化・実体化したと言う言語像とは異なる。ここでは「平均」という比喩が言語（ラング）成立における集団と個人の微妙な関係を照らしていたが、小林による訳語「媒体」は時枝の理解を著しく損ねてしまった。

1－4. 言語、実体、主体性

以上、小林による訳語「単位」「実在体」「媒体」と、小林訳を基にした時枝の CLG 理解について見てきた。時枝は訳語「単位」を根拠に、ソシュールは「対象に対して自然科学的な原子的構成観を以て臨んでゐ

る」と批判した。訳語「実在体」に影響されたのであろう、時枝は、ソシュールが「主体的な精神生理的現象である」言語（ラング）を、「継起的過程」から「並列的構造の単位」とし、「言語主体との交渉のない［…］物的対象と異る処のないもの」にしたととがめる。また、訳語「媒体」から、ソシュールは、「個人間に成立した一種の媒体であると考えることによつて言語（ラング）に外在性と実在性を与えようとする」と論難している。

時枝にとり言語とは言語主体の主体的活動と切り離せない「過程」でなければならない。

> 如何なる人によつても語られもせず、読まれもせずして言語が存在していると考へることは単に抽象的にしかいふことが出来ない。すなわち「我」の主体的活動をよそにして、言語の存在を考へることは出来ないのである。自然はこれを創造する主体を離れてもその存在を考へることが可能であるが、言語は何時如何なる場合に於いても、これを産出する主体を考へずしては、これを考へることが出来ない。（時枝、p.12）

言語とは過程であり、活動であり、主体性であるとする時枝にとり、ソシュールの言語（ラング）概念は、自然科学の対象と同様の主体性なき実体と映ったのである。そしてそこに訳語の問題が作用していたことは否定できない。だが、時枝の「誤解」の要因を全て小林の訳業に帰せられるかは疑問である。

そもそも時枝のソシュール批判はソシュール理論の全体系を見とおした上での批判のようには見えない。「言語（ラング）」「記号」などは「実体的」として俎上に載せられるが、「体系」「差異」「恣意性」などの、ソシュール理論の他の重要概念についての充分な考察は展開されていない。ソシュールにおいてはその諸々の理論概念全体が一つの体系をなしているが、そのような理論体系を包括する視点を時枝のソシュール批判のうちに感じ取ることはできない。

ただ、興味深いのは、見たように、そのソシュール批判はやや的外れだが、時枝の実体批判にともなう主体性の主張が、奇しくも、ヨーロッパにおけるポスト・ソシュール的な一つの動向と響き合うものがあるこ

とである。ソシュールは体系としての言語（ラング）をその学の中心に据えることにより、二十世紀の共時言語学という新しい地平を開いたが、まさにそのことにより、ソシュール理論における発話（パロール）の言語学の欠如を批判されることになった。「発話の言語学の不在はより際立っている。」CLG 初版のバイイとセシュエによる序文に見出される言である（p.10）。そして言語学におけるソシュール後の重要な動向の一つが、ソシュールがなさなかった「発話の理論」の展開であった。その代表的な論者の一人バンヴェニストは「ソシュールが立ち止まった地点の彼方に行く」ことを標榜したのだった（Benveniste, 1974、p.219[9]）。

ソシュールを原子論ときめつけ、その記号や言語（ラング）の概念を実体化されたものとした時枝のソシュール批判がややもすると滑稽だったのは、ソシュール言語学の中心的概念、「差異」「体系」「恣意性」などが、まさしくある根底的な実体批判の哲学をなしているからである。実体批判に関してはソシュールと時枝の間にはそれほど大きな距離はなかったのではないか。

一方、主体性という問題はどうか。時枝を発話（パロール）の言語学の系譜に属すものとすれば、言語過程説が一つの主体性の哲学であることは明らかである。それは発話行為（パロール）の主体性である。では、この点に関してソシュールはどうだろうか。言語（ラング）の言語学における主体性とは何か。

次章では、時枝のソシュールに対する実体批判を糸口に、CLG と原資料のソシュールとの間のある「距離」を測っていくことになる。そしてそれは、ソシュールにおける実体批判と主体性の問題が交錯する地点でもあるだろう。

2. 記号と主体

時枝『国語学原論』（p.66）は CLG 小林訳（1940）から次の箇所を引用している。

> 言語［ラング］は言［パロール］とは趣を異にし、切り離して研究しうる対象である。我々はもはや死語を話さないが、その言語的組織を我物にすることが出来る。（p.25-26。CLG, p.31）

時枝は続けて次のように論難する。

> 「言語（ラング）」はこのやうに話手の機能を除外した処の存在であるが、一方ソシュールは又、「言語（ラング）」の要素について、／この二つの要素はかたく相連結し，相呼応する（改訳本九〇頁）[10]／といつてゐる処を見れば、相連結し、相呼応する作用は、人間精神の作用によるより外ないのであるから、「言語（ラング）」は主体的機能なくしては考へ得られない存在であるとも考へられてゐるのである。このやうな矛盾は、畢竟するに、言語研究の根本に右の如き立場の矛盾が存在し、主体的活動である言語を、自然科学的単位の概念を以て説明しようとしたが為に他ならないと考へられる。（p.66）

時枝は、ソシュールの言語（ラング）は一方で主体性を前提にし、他方で話し手なしで存在しているとし、そこに矛盾を見ている。ところで、上で時枝がソシュールから引く「この二つの要素はかたく相連結し，相呼応する」という一文は、「それゆゑ言語記号は二面を有する心的実在体である」に続くものである。前章で我々が entité の小林による訳語「実在体」をめぐって論じた箇所にほかならない。そこでは、entité の訳語「実在体」を通して、時枝がソシュールの記号概念を質料的実体の意味に引きつけて捉えていることを見た。一方時枝は、概念と聴覚像という二面の相互的な連結と呼応からなるソシュールの記号を一つの過程として捉えている。実体と過程は相いれない。時枝にとって、この記号概念は矛盾でしかないのである。

だが、このソシュールの「矛盾」（と時枝には見えるもの）は、複数の誤解、複数の齟齬の複合によってもたらされた一帰結にほかならない。第一の齟齬は CLG と時枝の間にある。

第二は CLG と小林の翻訳との間のそれだ。これが原書（CLG）と読者（時枝）の間に介入している。さらに、我々の知らぬ間に介入している第三の齟齬があるのではないか。周知のように、CLG とは、ソシュールの講義を受講した学生たちのノートを基に執筆・編集された死語出版なのだからだ。すなわち、第三の齟齬とは CLG のソシュールと「原資料のソシュール」の間の齟齬である。

2－1. 記号の図[11)]

では早速、これまで問題にしてきた二つの文を手稿資料と照らし合わせてみよう。

それゆゑ言語記号は二面を有する心的実在体である
この二つの要素はかたく相連結し、相呼応する

仏語原文はそれぞれ以下の通りであり、ソシュール独特の言語記号の概念を説明する有名な三つの楕円の図をともなっている（CLG, p.99）。

Le signe linguistique est donc une entité psychique à deux faces［. . . ］
Ces deux éléments sont intimement unis et s'appellent l'un l'autre

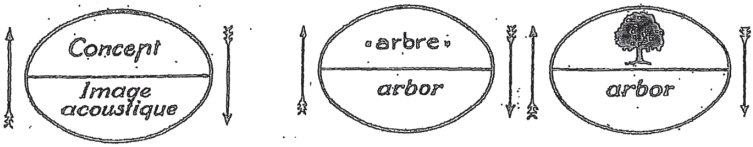
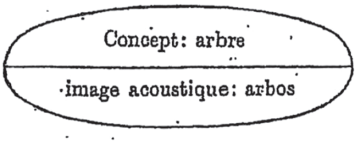


図 1

図を説明しておく。楕円は語（言語記号）を表し、その意味の面が concept（概念）、音の面が image acoustique（聴覚像）である。ラテン語を例にして、聴覚像（arbor）が概念（arbre「樹木」）と対応している。

さて、意外なことがある。第二の文に対応するものは、CLG の編者バイイとセシュエが参照した学生ノートの中に見当たらないことだ。この文は編者による創作なのである。また、図に関しても、原資料の中に描かれているのは、次のように一つだけであり、CLG はこれを基に三つの図を作りだしたのだろう。学生デガリエのノートから引く。



(CLG/E150 :1107)[12)]

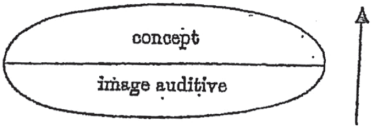
図 2

だが、CLG の三つの図は学生ノートの図に忠実だろうか。

すぐに気付かれることだが、あるささやかな違いがある。CLG の図はそれぞれ両側に上向きと下向きの矢印が一本ずつ添えられているが、学生ノートの図には一本の矢印も見あたらない。

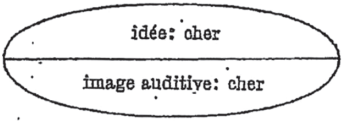
CLG の p.158 と p.162 にも同様の記号の図が載っている。そのどちらの場合も、いましがた我々が見たように、CLG の図にのみ二本の矢印が添えられ、その箇所に対応する原資料の図と異なっている。CLG の p.158 に対応する原資料の図（CLG/E258 :1858）には一本のみ上向きの矢印が添えられ、p.162 に対応する原資料の図（CLG/E263 :1898）には一本の矢印もない。

(*CLG*, p.158)



(CLG/E258 :1858)

(*CLG*, p.162)

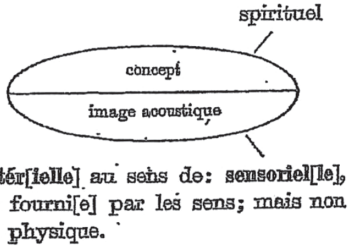


(CLG/E263 :1898)

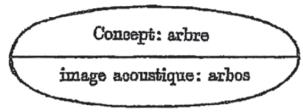
図 3

以下は、「一般言語学」の第三回かつ生涯最後の講義（1910-1911 年度）でソシュールが板書した記号の図を集めたものである。この七つの図のいずれにも、上向きと下向きの二本の矢印は付されていない。

1911 年 5 月 2 日



(CLG/E149 :1096)

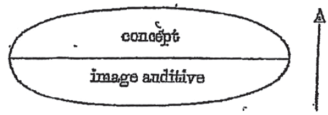


(CLG/E150 :1107)

5 月 12 日

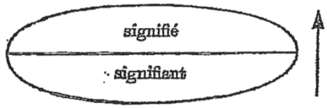
(CLG/E151 :1119)

6 月 30 日

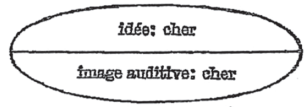


(CLG/E258 :1858)

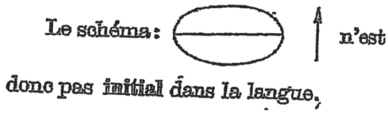
7 月 4 日



(CLG/E255 :1846)



(CLG/E263 :1898)



(CLG/E264 :1899)

図 4　デガリエのノートより

したがって、記号の図の両側に添えられた上向きと下向きの二本の矢印はCLG編者による創作なのである。そして、これに対応する手稿資料では、記号の図には一本も矢印は添えられていないか、添えられていても一本、上向きのみなのである。

このCLGと原資料における記号の図の違い、矢印の有無とその向きの違いは何を意味しているのか。

実は、バイイとセシュエ、CLG編者と「原資料のソシュール」との間の「言語（ラング）概念」の違いがそこに反映しているのである。

2－2. 発話の回路

発話の回路について復習しなければならない。

「言語学の対象」の章で展開された発話の回路の議論とは、既に見たように（注8参照）、二人の話者の間で言葉が交わされる言語活動（ランガージュ）の場面を「発話（パロール）」の循環として図式化したものだった。話し手の意識（心的部分）に浮かんだ概念がそれに対応した語音（聴覚像）と結びつく、この概念（意味）と聴覚像（音）の結合は語にほかならないが、次にこの語が声として発され（生理的部分）、音波として伝わっていき（物理的部分）、聞き手によって聴取される（生理的部分）。この音声が聞き手の脳裏に達し、聴覚像として捉えられると、それに対応した概念と結びつく（心的部分）。概念→聴覚像→発声→音波→聴取→聴覚像→概念、これが回路の半周だが、次に聞き手が話し手に転じ、語を発すれば、先程と同様の階梯を経て語がもう一人の話者に達し、回路が一周する。

したがって、記号の図に添えられた二本の矢印のうち、下に向かう矢印は、発話の回路において、概念から聴覚像に向かう方向を表している。概念（意味）と聴覚像（音）の二重体としてのソシュールの記号は、つねに上半分が概念、下半分が聴覚像の楕円形で図示されているからだ。すなわち、これから語を発しようとしている話し手の意識において、表現したい概念（語の意味）がそれに応じた聴覚像（語の音像）へと変換される過程である。たとえば、話し手が「上が板になっており、脚が付いていて、その前に座って本を読んだり、ノートを広げたりする家具」という概念を思い浮かべると、それが「ツクエ」という聴覚像を喚起する。このときの概念から聴覚像に向かう方向性だ。

それに対して、上に向かう矢印は、聞き手の受け取った音声が耳から意識へ到達し、ある語の聴覚像として認知された瞬間、この音形が指定する概念へと向かう、聞き手の意識の中での動きを表している。つまり、「ツクエ」と聞こえたとき「勉強や読書に使うあの家具」という意味が浮かぶが、このときの音から意味へ向かう方向性である。記号の図では、下半分の聴覚像から上半分の概念に向かう、上向きの矢印となる。

このように矢印の向きは、話し手か聞き手かという、言語活動における主体のあり方に対応しているのである。下向きは話し手を、上向きは聞き手を表している。

学生たちのノートの中に記された記号を表す図には、CLG においてと異なり、たいていの場合矢印が添えられていないという事実、そして、たまに矢印を伴うときは、二本ではなく一本の矢であり、またそれは上向きであるという事実は、記号概念における、したがって言語（ラング）概念におけるソシュールのある立場決定を示唆していないだろうか。すなわち、ソシュールの言語（ラング）概念は、話し手の側にではなく、聞き手の側に見出されるということの示唆である。

2－3. 連辞関係と連合関係

発話の回路を心的部分／生理的部分／物理的部分を含むものとして提示し（CLG, p.28）、さらに、外的部分／内的部分、心的部分／非心的部分、能動的部分／受動的部分など、様々に分析したあと、ソシュールは次のように続ける（CLG, p.29、1940 年訳、p.23）。

> なほ付言を要することは、聯合及び同位排列の能力である；これは記号を個別的に扱ふことをやめるや否や顕れる；体系としての言語の組織作用において最も活躍するものは、この能力である（p.163 以下参照）。

わかりにくい一節である。CLG 原文（p.29）にあたろう。

> Il faut ajouter une faculté d'association et de coordination, qui se manifeste dès qu'il ne s'agit plus de signes isolés; c'est cette faculté qui joue le plus grand rôle dans l'organisation de la langue en tant

que système (voir p. 170 sv.).

訳すと次のようになる。

連合と配列の能力を付け加えなければならない。この能力はばらばらな記号を相手にしているのではなくなるや否や現れる。体系としての言語（ラング）の組織において大きな役割を果たすのはこの能力である（p.170 以下を参照）。

この箇所の執筆にあたって編者が参照したと思われるデガリエのノート（p.176）は次のようだ。

相手にしているのがもはやばらばらな語でなければ、配列の能力を付け加えなければならない。つまり、受け取られた語詞像が複数であるや直ちに［働く能力］である。ここから、我々は言語（ラング）の観念に近づく。（［　］は引用者による補足）

学生コンスタンタンのノートの同じ箇所（第三回講義、p.268）も見よう[12)]。

個人のケースにとどまりつつも、この同じ回路を、現れる全ての語、反復される全ての機会に関して考察するならば、一つの区分を付け加えねばならないだろう。それは、（受け取られた語詞像が複数であるや否や）意識に少しずつ到達するあの全体に対して恒常的に働く作用である。受け取られた語詞像は主体にとっての特定の秩序にしたがうだろう。この配列作用によって我々は言語（ラング）という観念に近づく。

デガリエとコンスタンタンのノートには、CLG にはない「受け取られた語詞像」という語句がある。まず、「語詞像」だが、これは語の音声面「聴覚像」のことである。また「受け取られた」とあることから、発話の回路の中の、話し手の発話を聞き手が受け取り、その声が単なる音としてではなく、特定の語の聴覚像として認識された瞬間が問題になっ

ていることがわかる。

また、CLG には「ばらばらな記号を相手にしているのではなく」と、デガリエとコンスタンタンのノートには「受け取られた語詞像が複数であるや否や」とある。ここから、CLG が「連合と配列」、デガリエが「配列の能力」、コンスタンタンが「配列作用」と呼んでいる「能力」が、聞き手の意識が複数の語を受け取ったときに作動する働きなのだということがわかる。

CLG からの引用の末尾に示されている「p.176 以下[13)]」という参照箇所もヒントになる。これは CLG 第二部「共時言語学」第五章「連辞関係と連合関係」を指している。

連辞関係とは、言語（ラング）の複数の単位が前後に並べられ連辞をなすことである。接頭辞、語幹、接尾辞などの単語の下位単位は、正しい順序で結合されて語をなし、また複数の単語は正しく並べられて句や文をなす。複数の単位を配列して、連辞という有意味な上位の単位へと構成するこのような言語（ラング）の秩序を連辞関係という。

また、連合関係とは、潜在的な言語意識としての言語（ラング）の中に存在する諸々の語が、派生関係、意味の共通性、語構成の共通性、音の類似性など、なんらかの共通性により連想の糸で結ばれていることである。いわば言語（ラング）とは何千、何万という語からなる巨大な連想のネットワークであり、この言語（ラング）の秩序を連合関係という。

連辞関係と連合関係を平たく言い換えれば、言語体系を構成する「文法」と「語彙」のメカニズムとも言えよう。「辞項の間の関係と差異は二つの領域［すなわち連辞関係と連合関係］において展開される」（CLG, p.170）とあるように、体系（システム）としての言語のメカニズムを支える二つの軸である。連辞関係による配列の型に、連合関係により選択された語彙が充填されて話線が構成される。

また、連辞関係の型と連合関係の語彙的なネットワークを基に、聞き手が受け取った発話は分析・綜合されて理解される。連合関係とは連想が働いて語と語が結ばれることだが、それは同時に語と語の差異化でもある。「イヌ」から「オオカミ」が連想されるということは、「イヌ」は家畜、「オオカミ」は野生と差異化することでもあるからだ。連辞関係とは「キョウ・ワ・ハレ・ダ」（今日は晴だ）と正しい語順で構成することだが、これは「キョウ」「ワ」「ハレ」「ダ」と話線を分割すること

でもあり、時間軸上での語の差異化にほかならない。

「連合」と「配列」をめぐる問題に戻ろう。「受け取られた語詞像が複数であるや否や」とあった。聞き手が話し手から複数の語から構成される発話を受け取った瞬間を指している。そして、複数の語があるところ必ず言語（ラング）の連辞関係と連合関係のメカニズムが働く。そこに体系としての言語（ラング）の働きが典型的に現れる。ソシュールは、だからこそ発話の回路のこの部分、聞き手における心的な領域に言語（ラング）の在り処を見たのだろう。ソシュールはこうして発話の回路の中の、聞き手によって受け取られた聴覚像が連辞関係と連合関係の働きによって「連合」「配列」される部分に重要性を認め、言語学が取り組むべき研究対象としての言語（ラング）をそこから取り出すのである。

> 受信的で配列的な部分［…］私たちにとり言語（ラング）の領域であるのはこの領域である。（コンスタンタンのノート、p.269）

CLG 序説第三章「言語学の対象」は、来るべき言語学の中心的対象を確定するための、つとにエピステモロジックな考察の展開に費やされている。発話の回路とは、言語現象全体（ランガージュ）から、聞き手の心的領域に所在を特定されるものとしての言語（ラング）を、様々な分析を通じて取り出すための凝った「仕掛け」であったとも言えよう。

2－4. 話し手と聞き手という主体性

ソシュールの言語（ラング）は、発話者ではなく、まさに聞き手のうちに見出される。そしてこの話し手と聞き手の非対称性こそ、ソシュール言語（ラング）概念の核心ではないだろうか。というのも、同時に話し手であり聞き手であることのできる者は誰もいない。この話し手と聞き手の非対称な関係性はバンヴェニスト的とも言える。

> 私は誰かに話しかけながらでなければ「わたし」［という語］を使わない。そしてこの誰かは私の話しかけの中では「あなた」となる。人称を構成するのはこの対話の条件である。というのも、この対話の条件は、逆に、自分の番になると「わたし」と言って自分を示す者の話しかけにおいては私は「あなた」になるということを暗示しているか

らだ。(Benveniste, 1966, p.260)

話し手「わたし」と聞き手「あなた」の関係はどこまでも非対称だ。非対称的な交換関係であり、絶対的な非対称である。そこに言語主体の主体性の問題がある。ソシュールの言語（ラング）は聞く主体の側にあり、したがって聞き手の主体性と切り離せないのである。言語記号は概念と聴覚像からなる。この結合に方向性があるとしたら、思い浮かんだ意味から出発し、それに応じた語音を求める話し手においては、概念から聴覚像に向かう下向きになり、聞き取った音から、それが意味するところへと向かう聞き手においては上向きになる。ソシュールの言語概念が聞き手の立場に立つ以上、言語記号の図に矢印を添えるとしたら、それは上向きでなければならない。

しかし、CLG の編者は、下向きと上向きの二本の矢印を記号の図に加え、言語主体の根源的に非対称な主体性を中和してしまった。下向きと上向きの二本の矢印は、言葉を交わす二人の話者、話し手と聞き手の両方のあり方を一度に表してしまう。誰も一度に話し手であり、聞き手であることは出来ない。

ここに、上で見たように、「この二つの要素はかたく相連結し、相呼応する」という文が、原資料には存在しない、編者による創作であったことの謎も解ける。二つの要素とは語を構成する二面、概念と聴覚像だった。「相呼応する」とは、概念が聴覚像を喚起し、聴覚像が概念を喚起することである。前者が話し手において起きること、後者が聞き手において起きることである。しかし、人は常に話し手であるか聞き手であるか、どちらかだ。同時に両方であることはできない。この一文は、実際の言語主体の意識においては決して起きない事態を表していたのである。聞き手という主体性に即したソシュールの言語（ラング）概念とは、もとより相いれなかったのである。

二本の矢の付された言語記号は、話し手においてあるのでも、聞き手においてあるのでもない。二本の矢印の記号は主体性というものからすっかり断絶しており、したがって、主体に外在し、いかなる主体に対しても超越する存在、他と関係せず、それ自体で存在するもの、であるかのようだ。だが、「他と関係せず、それ自体で存在するもの」こそ「実体」の定義にほかならない。CLG 編者による、記号の図への二本の

矢印の付加こそ、記号の、したがって言語（ラング）の実体化にほかならなかったのである。

むすび

時枝はソシュールが言語（ラング）を実体化したと批判した。だが、CLG の編者、バイイとセシュエによるあるささやかな付加、記号の図への二本の矢印の追加こそ、言語（ラング）を実体化していたのである。ここに、言語（ラング）概念をめぐり、CLG と原資料との間に、ある距離が開けている。

CLG の邦訳の問題はわれわれをして二つの距離の前に導いた。一つは、CLG とその読者との間の距離であり、もう一つは、CLG とその翻訳との間に開けている距離である。この二つの距離は、次に、解釈の問題の入り組んだ複合体をなし、これに取り組む我々は、問題の錯綜があたかも一本の通路であったかのように端なくも導かれ、こう言ってよければ、第三の距離の前に自らを見出すこととなったのだった。最も本質的な距離、CLG と手稿原資料のそれである。ソシュールの声を聞いて書き取られた思想と、その書き付けを基にして編まれた死後出版の書物、ソシュールの名を二十世紀思想の代表的な記号のひとつとすることになった書物との間の不思議な距離である。

注

1） 本稿は、2016－2017 年度成城大学特別研究助成（研究課題名「日本のソシュール受容における「翻訳」の問題とソシュール理論の根底」）による研究成果の一部である。2017 年 1 月 9 日－13 日にスイス・ジュネーヴで開かれた国際シンポジウム Cours de linguistique générale 1916-2016 L'émergence での発表 «Le problème de la traduction du CLG dans la réception du saussurisme au Japon : la polémique Tokieda et la subjectivité dans la conception saussurienne de la langue » を和訳し加筆したものである。

2） 2016 年、CLG の新訳が刊行された。町田健訳『新訳 ソシュール 一般言語学講義』、研究社。

3） 以下などを参照のこと：丸山、1981［＝ 2014］、第一部第二章；前田、滝口、in 丸山, 1985；Suenaga, 2005, ANNEXE；松中完二、2018、三、四、七章。

4） とりわけ以下を参照のこと。服部、1957［1960 に収録］；前田、1978；

丸山 1981［= 2014］、第一部第二章；前田、滝口、1985。

5） 時枝、p.61、注二参照。なお、ここで時枝は、1940 年刊の「改訳本」を参照したとしている。

6） われわれは langage により広い意味を持たせるために「コトバ」と訳した。なお、このくだりの原文は次の通りである。

Pris dans son tout, le langage est multiforme et hétéroclite; à cheval sur plusieurs domaines, à la fois physique, physiolosique et psychique, il appartient encore au domaine individuel et au domaine social; il ne se laisse classer dans aucune catégorie des faits humains, parce qu'on ne sait comment dégager son unité.

La langue, au contraire, est un tout en soi et un principe de classification.

7）「聴覚映像」は image acoustique の小林による訳。我々は「聴覚像」と訳す。

8） CLG、p.21-22 で、二人の話者の間で言葉が交わされる言語活動（ランガージュ）の場面を「言（パロール）」の循環として図式化したもの。circuit de la parole「言の循行」（小林訳）と呼ぶ。言語現象（ランガージュ）から言語（ラング）概念を取り出し練り上げるための議論である。なお訳語だが、現在では、小林訳で「言」とされている parole は「発話」、circuit de la parole は「発話の回路」と訳すことが多い。

9） 1967 年の論文 »La forme et le sens dans le langage »、PLG II（1974）に収録。

10） CLG では p.99

11） 以下で論じる、ソシュールの記号の図と矢印の問題については他の処で言及したことがある。末永（2011）を参照のこと。

12） 引用出典を示す「CLG/E150：1107」は次のように読まれる：CLG エングラー校訂版、p.150, 断章番号 1107。以下同様。「文献」を参照のこと。

13） 1950 年代末に発見されたコンスタンタンのノートは、当然ながら CLG（1916 年）の編者は参照していない。

文献

Benveniste, Emile, 1966, 1974, *Problèmes de linguistique générale*, t. I, t. II, Paris, Gallimard.

服部四郎、1957a、「言語過程説について」『国語国文』26 巻 1 号、京都大学

——— 1957b、「ソスュールの langue と言語過程説」『言語研究』32 号、日本言語学会

——— 1960、『言語学の方法』、岩波書店

前田英樹、滝口守信、1985、「『講義』の影響とソシュール学 Ⅰ 日本」in 丸山圭三郎編『ソシュール小事典』

丸山圭三郎、1981、『ソシュールの思想』、岩波書店［= 2014］
———（編）1985、『ソシュール小辞典』、大修館書店
——— 2014、『丸山圭三郎著作集Ⅰ』、岩波書店
松中完二、2018、『ソシュール言語学の意味論的再検討』、ひつじ書房
Saussure, Ferdinand de, 1916, *Cours de linguistique générale*, publié par Charles Bally et Albert Sechehaye avec la collaboration de Albert Riedlinger, Paris / Genève, Payot.［本稿では CLG と略。頁は 1922 年の第二版による。］
———（ソシュール、フェルヂナン・ド）1928、『言語学原論』、小林英夫訳、岡書院
———（ソシュール、フェルヂナン・ド）1940、『言語学原論』、小林英夫訳、岩波書店
———（ソシュール、フェルディナン・ド）1972、『言語学原論』、小林英夫訳、岩波書店
——— 1967, *Cours de linguistique générale : édition critique*, par Tullio De Mauro, les notes et les commentaires de Tullio De Mauro traduits par Louis-Jean Calvet, Paris, Payot. Cité ici d'après la nouvelle édition de 1972［トゥリオ・デ・マウロによる校訂版。パイヨ書店から現在も刊行されている CLG 現行版は、1922 年の第二版に注と解説を付したこの校訂版である。］
——— 1967–1968, 1974, *Cours de linguistique générale : édition critique*, par Rudolf Engler, fascicule 1–3 (tome 1), fascicule 4 (tome 2), Wiesbaden, Harrassowitz.［CLG ルドルフ・エングラーによる校訂版。本稿では CLG/E と略。］
———（ソシュール、フェルディナン・ド）2016、『新訳 ソシュール 一般言語学講義』、町田健訳、研究社
Suenaga, Akatane, 2005, *Saussure, un système de paradoxes – langue, parole, arbitraire et inconscient*, Limoges, Lambert-Lucas
———（末永朱胤）2011、「ソシュールの記号概念と聴き手の立場—記号の図の矢印について」『ヨーロッパ文化研究』第 30 集、成城大学大学院文学研究科ヨーロッパ文化専攻
時枝誠記、1941、『国語学原論』、岩波書店